集中 OPINION

AIが視覚を補う未来の実現に向け グローバルにチャレンジを続ける

浅川 智恵子

日本科学未来館 館長
IBMフェロー

AIやデジタル技術の進歩は私達の生活の利便性を大きく向上させた。スマートフォン等の道案内機能を使う様になって道に迷わなくなったという人も多いだろう。こうした技術は障害の有る人達の生活の質の向上にも貢献するのではないかと期待されている。事故によって14歳で失明しながら、IBMの優れた技術者として日本人女性初の「IBMフェロー」の称号を受け、2年前には「日本科学未来館」の館長に就任した浅川智恵子氏も、デジタルやAIを使って視覚障害者を支援する技術やツールの開発に取り組んでいる。そんな浅川氏に技術開発への思いや今後の夢等について語って頂いた。

――2009年に日本人女性初のIBMフェローに任命されました。会社ではどの様なキャリアを積んで来られたのですか。

浅川　入社当初は、点字のデジタル化プロジェクトやウェブページを音声で読み上げるソフトウェアの製品化に取り組んでいました。その後、会社に在籍したまま大学院に入り、04年に博士号を取得し、IBMフェローを目指そうと考える様になりました。その思いを上司に伝え、テクニカルリーダーとしてIBMフェローへのステップを踏んで行きました。

――視覚に障害が有る事で、苦労も多かったのではないでしょうか。

浅川　大変だったのは働きながら大学院に通った頃ですね。仕事と研究を両立して、国際学会や学会誌で研究内容を発表し、博士論文を書かなければなりません。この3年間を乗り越えた事でフェローを目指すという目標も出来ました。05年にシニアテクニカルスタッフメンバーに就任しましたが、そこから4年でIBMフェローになれたのは、かなり早かったと思います。入社から博士号を取得する迄の研究がベースとしてきかったですね。

――お一人で出張した事も有ると聞きました。

浅川　25歳位 た頃 が、目の見えない女性が1人 2週間 こしたのですから凄いチャレ です。 の有るテクニカル系社員の情 換セ する為に渡米したのですが、 違いスマートフォンもオンライン予約も無い時 す。今なら、ネットを通して信用出来るリムジ タクシーを呼べますが、当時はそ

続きを読むには購読が必要です

詳しくはホームページをご覧下さい